

社会福祉法人若竹会 幼保連携型認定こども園あそびの森あきわ

4歳児30名、5歳児28名の2クラス公開

題材名

「ピタゴラ装置（4歳）」「ピタゴラ装置作り（5歳）」

授業者 宮之上格、藤森春菜（4歳児）
須澤ひなの、宮下絢野、小田切友紀（5歳児）
指導者 小川 浩貴（学びの改革支援課指導主事）

1 本時のねらい（養護と教育面のうち表現、人間関係、言葉の3つのねらいから抜粋）

(1) 4歳児

- ・ものの性質や仕組みなどを感じ取ったり、気づいたりする。（表現）

(2) 5歳児

- ・本やDVDを見ながら、仕組みや仕掛けに気づく面白さや喜びを味わう。（思考力）

2 視聴覚機器の役割

子どもたちのやりたいことがあふれた教室で、これまでに調べたり参考にした足跡（図鑑や作り方の説明、写真など）を掲示や手が届くところに用意。タブレットは新たに調べたいことのために用意。必要な時に利用できるような場づくりがなされていた。



3 授業の概要

「子どもは生まれながらに学ぶ力をもっている」を信条にして活動を計画しており、4歳児、5歳児の両クラス共に、今各自がやりたいと思うこと、子ども自身が夢中になれることをとことんやる時間となった。

ピタゴラ装置、おみくじ、化石作り、宇宙調べ、パン作り、町作り等の活動などに興味をもった子どもたちが集まって、色塗りをしたり、制作したりした。



雨上がりでナメクジを発見した子どもは、虫かごに入れて近くで観察し、ナメクジが何を食べるのかを知りたいと、保育者に伝え、タブレットで調べてもらっていた。

その中で、ナメクジとカタツムリの違いについてさらに興味がわき、生き物好きの友だちに伝えたり、似た生き物について教えあったりしていた。

た。

その中で、ナメクジとカタツムリの違いについてさらに興味がわき、生き物好きの友だちに伝えたり、似た生き物について教えあったりしていた。

ピタゴラ装置に打ち込む子どもたちは、ビー玉通路の材料をクリアファイルにしたことで、ビー玉がカーブを描いて落ちる



面白さが生まれ、繰り返し転がして楽しむ姿があった。

4 研究会の要点

- ・子どもたちの要求を満たす環境、場づくりの良さや工夫。見たいときに見て、使いたいときに材料が得られるような教室のコーナー分けや引き出し、掲示の利用。
- ・視聴覚教材利用によるやりたいことや作りたいものへのイメージの具体化。
- ・デジタル図鑑や動画の活用。
- ・子どもたちの思いの広がりや地域活用について。材料探し、必要物品の買い物体験。
- ・子どもの思いの違いを受け止めながら活動を選択する際の保育者側の工夫や留意点。

5 指導者の助言

子どもたちがやりたいことに満たされ、豊かな時間を過ごしている園で、保育者たちは、子どもたちを「小さなピタゴラ探究者」と捉えている。先生方が、子どもたちがやりたいことを行っているときに生まれる「なぜ上手いかないのか、どうして？」という子どもにとっての問いをうまく見とっている。その上でICT・DVD・図鑑などで確かめてみようと思っている。子どもたちが必要感を持ち、本物を目指し、憧れをもって取り組んでいる。

ピタゴラ装置を試行錯誤しながら作る中で、周りの子が集まり、面白いと気づくことがあれば、自然と協働する。同じ遊びの中でも面白さを感じている中身は子どもによって異なる。子どもの思いや願いに対して、見守るか、関わるかを保育者が瞬時に判断している。子どもと先生のやりたい思いにあふれた場所になっている。学校もやりたいことにあふれた場所にしたい。

6 今後の課題

活動の中で高まった興味や関心、好奇心や探究心を持ち、深い学びに繋がること。それが更に新しい視点や自分らしい柔軟な発想に育っていきけるとよい。